月刊バイブル（世界のベストセラー、聖書のトリビア）

第１１号

発行:レムナントキリスト教会

価格:１００円（送料込みで２００円）

〔目次〕

◎聖書からのメッセージ:キリストは門である　エレミヤ
◎高ぶりを打ち砕く:進化論の誤り(7)「何らの進化もしなかったシーラカンス」
◎箴言から学ぼう！:神さまは報いをする
◎詩篇を読む:いやしは神（イエス・キリスト）にある
◎キリストを信じた体験談:夢を通して警告を受けた　シャローム
◎聖書に関する偉人のことば:ヘレン・ケラー
◎ご案内:聖書贈呈、聖書通信講座

＜聖書からのメッセージ＞
キリストは門である
エレミヤ

〔聖書箇所〕ヨハネの福音書10:9,10
10:9　わたしは門です。だれでも、わたしを通ってはいるなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。
10:10　盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。

今回は、「キリストは門である」として、上記聖書箇所から学んでいきたいとおもいます。学校や大きな会社などに門があります。重要な機密がある会社などは、門にガードマンがいて、あやしい人は通してくれません。しかし、そのような厳重な会社の門でも、会社が許可した入門証を持っていれば、入ることができます。かように、門は入る人を制限するのです。おなじ意味合いで、天国も、だれでも入れるとはかぎりません。むしろ、入れない人のほうが多いようです。しかし、天の国にも門があり、その門がキリストご自身だというのです。それで、わたしたちは、だれの名でもなく、しかし、キリストの名を通して天の御国へ入る、ということが聖書の語っていることです。

「だれでも、わたしを通ってはいるなら、救われます。」

ここで書かれている**「救い」**ということばの意味合いを考えましょう。**「救い」**ということばの反対語は、そうですね、「滅び」ということばでしょうか。聖書によるならば、人は死後、だれでもさばきを受けます。

「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」（ヘブル人への手紙9章27節）と書かれているからです。

「さばき」とは、すなわち「裁判」というような意味合いでしょうか。その裁判の結果、ある人は永遠の命を受け、ある人は永遠の滅びを受ける、という

ことが、聖書の語るさばきの結果です。死後のさばきやら、裁判などあまり聞きたくないことばかもしれませんが、いずれ、だれでも必ず通ることなので、少し考えてみたいとおもうのです。

学校でも一学期の間、授業がおこなわれた後、そのまま夏休みに入り、遊びに行くわけではありません。そうではなくて、学期末には試験があり、その学期の授業を、どれだけ正しく学んでいたのかを試験されます。おなじ意味合いで、わたしたちの人生は、好きなように生きてそれで終わりというのではなく、われわれはだれでも死後、必ず神の前に立ち、それぞれの人が生きている間におこなうすべてのことに関して、さばき、裁判を受けるようになるのです。

そして、そのさばき、裁判の結果、正しい人は永遠の命を受け、罪を犯している人は、永遠の滅びへ入ります。しかし、現実問題、もし、そうなら、死後、滅びに入らない人などだれもいません。こんなふうに書いているわたしも、自信はまったくありません。なぜなら、だれでも大なり小なり罪があるからです。うそをついたことのない人はいないでしょうし、悪口をいったことのない人はいないでしょう。そうではありませんか？

しかし、前にも書きましたように、そのようなわたしたちではあるのですが、神は特別な救済処置、救いに入るひとつの方法を用意し、講じてくださったのです。そして、それがキリストという方法、われわれの罪を十字架に負って死んでくださったキリストという方法なのです。それらの事柄を前提として、ここではキリストが、**「だれでも、わたしを通ってはいるなら、救われます。」**と語られているのです。

キリストという門を通るなら、私たちは決して死後、滅びや刑罰の火に投げ込まれることがなく「救われる」、それがここで語られていることなのです。

「また安らかに出入りし」

キリストという門を通して、わたしたちは入るべきところへ入ります。門は人を区分します。公園の門のように、だれでも入れる門もありますが、しかし、狭き門である東大の門のように、入るのが難しい門もあります。聖書によるならば、私たちが永遠のいのちを得ることはむずかしく、また、永遠のいのちに至る門は狭いようです。こう書いてあるからです。

〔聖書箇所〕マタイの福音書7:14
7:14 いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。

しかし、そのように入りづらい永遠のいのちへの道も、キリストという門を通して、わたしたちも入っていくことができるのです。

「牧草を見つけます。」

ここでは、人を羊になぞらえて**「牧草」**ということばが使われています。羊にとって大切なのは、牧草です。人がパンや米を食べるように、羊は牧草を主食としているからです。わたしたちは、自分たちの体を維持するための食物を必要としています。そして、それだけではなく、その心においても、わたしたちの心を満たす食べ物を必要とするものなのです。

そのわたしたちの心を満たすために、この世には色々なものがあるかもしれません。ある人は小説を通して心を満たすかもしれません。ある人はテレビの番組、あるいは映画、好きなミュージシャンの音楽、ある人は打ち込んでいる部活、仕事、それから恋愛であったり、酒を飲むこと、ギャンブルなどです。でも、それらがほんとうにわたしたちの心を満たし、わたしたちの心がお腹いっぱいになるかどうかはわかりません。映画を何本見ても、それでもやっぱり満たされない心の空虚さを経験したりするものなのです。

しかし、そのようなわたしたちに対して、キリストは、この門を通して入るなら牧草を見つけることができる、わたしたちの心の空腹を満たす食物を得ることができる、と説きます。

そうかな、とおもうかもしれませんが、それはほんとうです。というのは、わたし自身がそのような牧草を得、キリストにより、自分の心の空腹を満たすことを経験したからです。わたし自身、以前は、この世の小説やら映画を見て、心の空腹を満たしていたものです。しかし、それでも、この世の生き方

はどれもむなしく、わたしは心の空腹を感じていたものです。しかし、キリストを信じ、聖書に書かれたキリストのことばを受け、食べるようになり、もう空腹を感じなくなりました。たとえば、自宅の奥さんの手料理がおいしいと、それで満足して他の店で外食などしないものだ、とどこかで聞いたことがあります。

わたしにもおなじような状態が起きました。教会へ行ったり、聖書を通してキリストのことばを受けることで、心が満たされ、お腹が満腹状態なので、もう外食、すなわち他で心を満たす必要がなくなってしまったのです。

それ以来、以前読んでいた小説も、また、テレビも映画も、また、この世的な音楽も聴かなくなりました。別に禁止されているのではなく、自分からそれらで心を満たす必要を感じなくなってしまったのです。興味も失せてしまいました。世間の人がよくいう、お酒を飲んでウサを晴らすということも、自分には無縁となりました。そういう必要がないからです。

特別強制したり、無理に薦めたりすることではないのでしょうが、しかし、キリストのことばこそが、わたしたちの心を満たす、空腹を満たすものとなる、ということは、このようにわたしが自分で大いに経験していることですので、そのことはお伝えしておきたいとおもっています。

10:10 盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。

羊に近づくのは、世話をする羊飼いですが、それだけではなく、羊どろぼうや狼も近づきます。でも、そんなものについて行くなら、羊はいのちを失います。そのことは、われわれに関してもおなじなのです。わたしたちに近づくのは、わたしたちに益を得させようとする羊飼いだけではなく、盗人や狼も近づいてくるのです。世の中には良い教えといわれる教えも多くありますが、しかし、どの教えでもよい、すべてがいのちに至る、などとは残念ながら、キリストは語っていません。逆に、盗人といわれる方法があり、道があることを語られています。そして、それにしたがうなら、盗まれたり、殺されたり、滅ぼされたりします。このことも心にとめておきましょう。

「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。」

キリストが来られたのは、羊であるわれわれが**「いのち」**を得るためである、それだけではなく、そのいのちを豊かに、大いに得るためであることが、ここで書かれています。それで、キリストを信じ、受け入れる人は、心にいのちを受け、しかも豊かに持つようになります。このことはほんとうです。わたしたちがキリストを受け入れるとき、内側に真にいのちを受けるようになります。そして、それはあふれ出て、他の人にも及ぶようになるのです。

わたしのことをいうなら、以前は自分のことしか考えていませんでした。自分のかせいだお金は、当然自分のために使う、自分の時間も、自分の楽しみや自分の教養や自分を高めたり、自分の益のために使う、そんな人生でした。でも、キリストを信じていく中で、聖書のいう豊かないのちが与えられ、人のために尽くす気持ちが起きてきました。たとえば、わたしたちは自分の費用で、また、自分の時間でこの冊子を作成し、配るようにしています。正直、金銭的には持ち出しです。でも、喜んでやっています。それは、わたしたちの心が変えられて、このような方法を通して、一人でもキリストを知ってほしいという気持ちが与えられたからなのです。以前は自分本位だったわたしでしたが、こんなふうに、キリストのいのちにより、心が変えられていくようになりました。

キリストは門である

高ぶりを打ち砕く:進化論の誤り(7)何らの進化もしなかったシーラカンス

人はどこから誕生したのか？その問題に関して聖書は「神が人を創造した」と述べます。しかし、日本においては、学校で進化論が教えられており、人は猿から進化したと説きます。では、その進化論は正しいのか？それをこのシリーズでみています。

櫓をこぼつ:進化論の誤り(7)
「何らの進化もしなかったシーラカンス」

進化論者が、これこそ進化の証拠として教科書にも載せてきましたが、実際はそうではなかった、という例はいくつもあります。そのひとつは、シーラカンスの件です。

化石の中に、シーラカンス（魚:Coelacanth）と名づけられた魚があります。絶滅したため、現在ではどこにも生息していないとおもわれたので、進化論者たちは、この魚を古代の魚だと断言しました。そして、この魚こそ、進化論を実証する中間種の魚だと主張しました。陸上の動物と海の魚とを結びつける進化の過程における、今はないミッスッイング・リンクの重要な魚だというわけです。

シーラカンスには、肉鰭類というしっかりした足のようなヒレがあるので、このヒレが進化して足になったと彼らは考えたのです。進化のかぎをにぎるシーラカンスは、約６５００万年前に、絶滅していたと考えられていました。化石だけが残っていたのです。進化しない生物は滅び、進化した適者は存続するとの進化論の理論どおり、進化途上の生き物、シーラカンスは絶滅し、進化したものだけが現在まで生き残っている、ということになっていたのです。

彼ら、進化論者は、生物の進化には気が遠くなるような長い年月をかけた、偶然のくりかえしが必要だと思いこんでいましたので、想像力を働かせ、シーラカンスが絶滅した時期を、独断と偏見によって決めました。そして、それを教科書に、あたかも真理であるがごとく、掲載していました。かつて進化の途中で存在し、今は絶滅してしまったシーラカンスは、進化のかぎをにぎる重要な魚だったのです。

さて、その後、この進化論者の理論をひっくり返す事件が起きました。１９３８年に南アフリカの北東沖で、１９５２年にはインド洋で、１９９７年にはインドネシア近海で、生きているシーラカンスが発見されたのです。これらは化石で見つかる「古代」のシーラカンスと、まったく違いが見あたりません。何ひとつ進化していなかったのです！

この発見は何を語るのか？それは、進化論者のいうような進化を、シーラカンスが何ひとつおこなわなかったことを示すのです。つまり、進化などということは、単なる空想の論理にすぎず、実際には進化など、何千万年かかっても、決して起きないことをこの生きたシーラカンスは証明してしまったのです。

シーラカンスとおなじように、化石の時とまったくおなじ、そのままの姿、形で、現代でも生きている動植物はたくさんあります。何億年前とされる銀杏や葡萄の葉の化石をみても、現在のものとほとんど変わりません。４０００万年前の蟻だ、何百万年前のカマキリの化石だといわれているものでも、今日わたしたちがみることのできる蟻やカマキリとまったくおなじで、変わってはいないのです。聖書は、人や動植物の創造に関してこう書いています。

〔聖書箇所創世記1:31
1:31 そのようにして神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常によかった。

神の創造したものは非常によかった、完全だったのです。したがって、どの魚も動物も、これ以上、改良や進化する余地など何もなかったのです。そして、事実、シーラカンスの例でわかりますように、何千万年経ようとも、どの魚も人も、何ひとつ進化などしていないことをみるのです。進化論は、人の思いこみにすぎないことを知りましょう。

シーラカンス

箴言から学ぼう！:神さまは報いをする

〔聖書箇所〕箴言11:31
11:31 もし正しい者がこの世で報いを受けるなら、悪者や罪人は、なおさら、その報いを受けよう。

わたしたちは世の中で生活をして、たとえば人に対して何か直接良いことをしたとしますよね？そんな時に、ある人は「ありがとう」とお礼をいってくれたり、また、親しい人だったりすると、何かしてくださったりする、なんていうことがありますよね？そして、また、学校において、何かが他の人よりもずば抜けていたりするときに、賞状をいただいたりする、なんていうこともあるとおもいます。こういったことは、いずれも「報い」を受ける、ということになります。

しかし、中には、人知れず、良いことをおこなっている、という方も多数おられます。そういう人は、特にだれからもお礼をいわれたり、何かをいただく、なんていうことはありません。それどころか、みとめられる、ということもありません。けれども・・・そういったことをくまなくご覧になっておられるお方がいます。天の父なる神さま（イエスさま）が、まさしくそうなのです。たとえだれも気づかなくても、しかし、神さまはお一人一人のことを常にご覧になっておられているのです。

それで神さまはどうされるのか？というと、**「正しい者がこの世で報いを受けるなら」**とありますように、神さまが「報い」をくださるのです。それはきっと、不思議な方法でくださるのだとおもいます。ですから、もし、「これは良いことだ」なんておもうことがあって、実践されていることがありましたら、ぜひ、継続されていくことをおすすめいたします。それに関して、聖書にはこのように書かれています。

〔聖書箇所〕ガラテヤ人への手紙6:9
6:9 善を行なうのに飽いてはいけません。失望せずにいれば（KJV:弱り果ててしまわなければ）、時期が来て、刈り取ることになります。

まず、ここで、**「善を行なうのに飽いてはいけません」**とあります。クリスチャン、ノンクリスチャン問わず、わたしたちはだれもが、「原罪」を持っているゆえに、生まれつきの性質はどちらかといえば、「善」をおこなうことは飽きやすい、つまり嫌になりやすい、もっというなら、そういうことはあまり好まないのでしょう。

しかし、**「失望せずにいれば～刈り取ることになります」**といわれていますように、そこで、音を上げることなく、じっとおこないつづけていくときに、**「刈り取る」**のです。英語では、「行為の結果として受け取る」というふうにも訳されていますが、善いことをひたすらおこなっていくときに、それに対して受け取る時がくる、ということをいわれているのです。

前号の「詩篇を読む」におきましても、「良いことをおこなっていきましょう！」ということを語りましたが、人からみとめられるうんぬんは別として、ぜひ、善をおこなうことに努めていきたいとおもいます。そうするなら、神さまからもれなく、「報い」を受けることとなります。しかも、「良い報い」ですので、おすすめいたします。

けれども反対に・・・善をおこなうことをどこまでも拒否してしまうときに・・・そして場合によっては上記みことばにありますように、「悪者」とか「罪人」というふうに神さまにみなされてしまう場合に、悪い意味合いでの「報い」を受けてしまう可能性があります。それはこの世でもそうかもしれませんが、しかし、もしかすると、後の世でも受けてしまう可能性がありますので・・・そうすると、「天国」に入れなくなってしまう可能性がありますので、気をつけていきたいとおもいます。

よろしければ、日々、善をおこなって、神さまからの良い報いを受けていきたいとおもいます。

それぞれの人に報いを与える神

詩篇を読む:いやしは神（イエス・キリスト）にある

〔聖書箇所〕詩篇6:2,3
6:2 主よ。私をあわれんでください。私は衰えております。主よ。私をいやしてください。私の骨は恐れおののいています。
6:3 私のたましいはただ、恐れおののいています。主よ。いつまでですか。あなたは。

とつぜんですが、ひとつ質問させてください。今、感情とか心が入り乱れていませんか？もしくは、過去、そのような経験をしたことはありませんか？この質問と、上記聖句と何の関わりがあるのか？とおもわれるかもしれませんが・・・すこし、順を追って説明させてください。

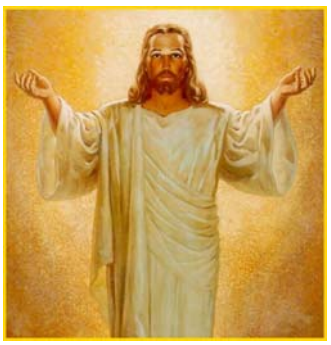
上記聖句は、ダビデの賛歌のひとつです。その中で、**「いやし」**ということばが出てきます。その前には、**「私は衰えております」**ということをいわれています。ＫＪＶ訳では、「弱い」とか「力のない」とあります。この時、ダビデは弱っていたのでしょう。それで神さまに向かって、**「私をいやしてください」**といったのでしょう。一般的に、「いやし」と聞くと、からだの弱っているところをイメージするとおもいます。もちろんそれも一理あるのですが・・・しかしここでの「いやし」は、「心」のこと、具体的には、感情に関してのことを扱っています。なぜか？というと、３節で、**「たましい」**のことがいわれているからです。つまり、霊的ないやしについて、いわれているのです。また、**「おそれおののいています」**のところは、英語では、「いらいらした」「怒った」「散々議論した」とあります。ずいぶん訳がちがうのにビックリなのですが、しかし、ＫＪＶ訳のほうが新改訳よりも古いので、こちらのほうを優先したいとおもいます。

そうなんです。この時ダビデは、いらいらしたり、怒ったり、という感情を持っていたのでしょう。要するに、心が荒れていた状態だったのでしょう。それで神さまに、**「主よ。私をあわれんでください。・・・私をいやしてください」**と祈ったのでしょう。

いかがですか？ふつう、もし、心がそういった状態に陥ってしまったら、どうしますか？テレビを見て気分を紛らわす？それとも人に話して気分をスッキリさせる？もしくはショッピングをして気持ちを晴らす？もちろんそのような方法もあるとおもいます。そして一時的には良いのだとおもいます。あるいは落ち着くのかもしれません。でも、真の解決になるのか？根本的に改善されるのか？あるいはいやされるのか？というと、「うーん？」と、いう感じではないでしょうか？

知り合いのクリスチャンから聞いた話なのですが・・・以前その人は、ある出来事を聞いて、とても悲しい思いになったことがあったそうです。ダビデのように、イライラしたり、怒ったり、というわけではありませんでしたが、しかし、心の中は平穏ではなく、深い悲しみに包まれていたそうです。そのときにその人はどうしたのか？というと、ダビデのように、神さま（イエス・キリスト）にあわれみを求めて祈ったそうです。「どうか、内側の悲しみを取り去ってください。」と。すると・・・しばらく祈りつづけていくうちに、だんだんと心が平安になり、すこしずつ悲しい思いが消え去り、そして喜びがあふれてきたそうです。しかも、その出来事について、前向きに考えられるようになったそうです。

そう、この話をとおして申し上げたいことは・・・心、つまり霊的ないやしは、主なる神さま（イエス・キリスト）にある、ということです。たしかにこの世には、ありとあらゆる方法があるのですが、しかし、真のいやしや力は、天から来るのです。そして、そのいやしの力は完全なのであります。なんといっても、全知全能なる神さま（イエス・キリスト）からのものですので・・・もし、心が病んでいるとか、今ひとつ元気が出ない～、なんておもうことがありましたら、ぜひ、実践してみてください。


いやしはキリストにおいてなされる

キリストを信じた体験談:夢を通して警告を受けた(シャローム)

“24 この世界とその中にあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住みになりません。
25 また、何かに不自由なことでもあるかのように、人の手によって仕えられる必要はありません。神は、すべての人に、いのちと息と万物とをお与えになった方だからです。(使徒の働き17章24,25節)”

今回の文章は、第８号の「偶像の神から救われて」のつづきです。わたしは仏壇のある家に生まれ、特に何も考えることなく、仏壇のある生活をし、仏壇を拝む生活をしていました。その後、わたしはキリストを信じ、聖書を通して仏壇や偶像を拝むことは、神によろこばれないことを知るようになりました。その話のつづきです。

ある年、地方から来られたクリスチャンと主人とわたしの３人で話す機会がありました。その時、お葬式の話が出て、その話の中で、主人がわたしに対して、「たとえ、自分の親族の葬式であっても、仏壇を拝むべきでない」ということをいってきました。「聖書的にはそうなのかもしれないけれど、今そんなことを人前でいわなくても」と、わたしの心の中では少し不満な気持ち、つぶやきがありました。そうそう素直になれなかったのです。

さて、その日の夜です。今まで何年も悪夢を見たことがなかったのに、寝ているとき、再び悪夢がわたしを襲ったのです。その夢の中では今まで出会ったこともない男の人が、気味の悪い人相をして、わたしの前にいました。

その人は仏壇を指して、「拝め！拝め！」とくりかえし、くりかえし、わたしに対して語りました。激しく大きな声で、わたしに対して強制したのです。そのように迫られ、わたしは心臓がドキドキし、苦しくなり、困りました。そして、まさにその時に目が覚めたのでした。それは、夢だったのです。目を覚ましたあと、この夢が悪霊的なものであること、悪霊からきた夢であることがわかりました。

わたしが仏壇に対してハッキリした態度を取っていなかったので、悪霊につけこまれたのかもしれません。それで、すぐに悔い改め、寝ていた主人を起こして、とりなしの祈りをしてもらいました。その後は、そんな悪夢は見なくなりました。夢を通してわかったことは、悪霊は人を偶像や仏壇へ引っ張り、結果として、その人を滅ぼそうとしていることです。聖書には、偶像を拝むことは、悪霊と交わることだと書いてあるからです。

“いや、彼らのささげる物は、神にではなくて悪霊にささげられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。(第一コリント人への手紙10章20節)”

さらに、聖書によるならば、偶像とは、人を神から引き離すあらゆるこの世の肉の欲、目の欲をも含むようです。神さまより、自分が強いという人は、この地上に一人もいません。神がすべてを支配しておられます。わたしたちは神によって創られたので、神の元に立ち返ることで、霊的ないやしや解放があるのです。人の教えより、神のことばである聖書のことばが、どこまでも正しく、間違えがありません。

あれから、だいぶ月日が経ちました。神さまを知れば知るほど、どんなものにもまさって、永遠のいのちの大切さをおぼえます。目にみえることに価値があるのではなく、むしろ目にみえない、永遠に朽ちないものに、真に価値があることを、神さまはわたしにおしえてくださいました。

偶像崇拝をしていたときは、自分の力がすべてであったのに、今は神に生かされていることをひしひしと感じます。全能なる神さまに、感謝します。

夢を通して警告を受ける

聖書に関する偉人のことば:ヘレン・ケラーのことば／お知らせコーナー

＜聖書と偉人＞

ヘレン・ケラー

アメリカの教育家:社会福祉事業家。自らも重い障害を背負いながらも、世界各地を歴訪し、身体障害者の教育・福祉に尽くした。

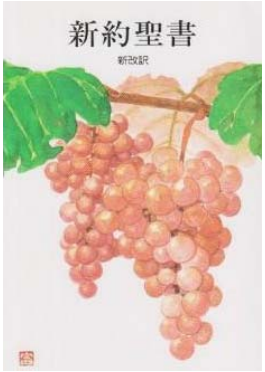
「わたしが毎日、もっとも愛読する書物、それは聖書です。わたしの辞書に、“悲惨”という文字はありません。聖書はダイナミックな力であり、変わることのない理想を示すものです。」

＜お知らせコーナー＞

●聖書贈呈プレゼント！聖書通信講座！

月刊バイブルお読みになっていかがでしたか？少し、聖書に興味がわいてきましたでしょうか？このたび、当教会では聖書贈呈、プレゼントをおこなっています。申込者全員へ贈呈可能です。よろしければ、この機会に、あなたも聖書を読んでみませんか？また、ご希望の方には、聖書通信講座も開設しました。ご興味がありましたら、ぜひ、お申し込みください。

以下を記載の上、mail:truth216@nifty.com もしくは fax:020－4623－5255 もしくは tel:042－364－2327 へ連絡ください。



見本

（1）聖書贈呈に申し込みます。
（2）聖書通信講座に申し込みます。
＊ご希望の番号に○をつけてください。（複数可）

郵便番号:
住所:
名前:

●レムナントキリスト教会「日曜礼拝」のご案内

曜日/時間:毎週日曜日/午前 10:30－12:30,午後 14:00－16:00
場所:東京都、京王線府中駅前、府中グリーンプラザ本館（tel:042－360－3311）
1F のエレベーター脇の部屋表示板で、「レムナントキリスト教会」の部屋を確認ください。
どなたでも来会歓迎、入場無料です。tel:042－364－2327, mail:truth216@nifty.com

★教会のHPもあります。
ご興味のある方は、“Yahoo！Japan”で、「府中　レムナントキリスト教会」で検索ください。
尚、レムナントキリスト教会はプロテスタントの教会です。ものみの塔や統一教会とは関係ありません。

☆クリスチャンになったばかりの方やノンクリスチャンの方におすすめのサイト:オリーブ＆ミルトス
http://remnantnotudoi.jimdo.com/
☆クリスチャンの方におすすめのサイト:エレミヤの部屋
http://www.geocities.co.jp/Technopolis/6810/